

古川柳研究会会報

一五〇号

平成二十年九月

川柳評万句合明和四年輪講

平成二十年七月十二日

礎講 鴨下恭明

明四松3続き

3 ○ おれなれハ目方があると遣_レ手いゝ 拾八7

(俺なれば目方があると遣り手言い)

仙台高尾の句。伊達綱宗侯が、高尾の体重と同量の黄金を支払って身請けしたという俗説を踏まえて、三浦屋の遣り手が「俺だったらもつと目方があるのに」と言っただろうと。遣り手は肥満体というのが約束。

すきんせん事とちぎりにぶらさがり 四16

面という意。そのために多額の持参金を付けて嫁に出すことになるのである。

うにかふる吞せ持参をこしらへる 見利寛五325

6 正月を嫁もそろくかなしかり 五10

(正月を嫁もそろそろ悲しがり)

正月が来るのを嫁がそろそろ悲しがるようになってきた。正月が来れば年も取るし、嫁として年末年始の煩わしい仕事もある。幼いときのように、単純に正月が楽しみという年ではなくなってきたのである。

二ッ掘_ル穴ハ齡の一里づか 六七3

7 ○ 大引_キハきんせんとしてくつすなり 五10

(大引は欣然として崩すなり)

大引_ニめくりカルタ用語。三人でめくりを打つ時、親・胴_ニに次いで最後に札をめくる者。(江)

めくりカルタで、大引が、他の者が揃えようとしている役を崩して喜んでいる様子。大引の位置は他の二人に比べて有利であるとされ、他の役を崩せば勝つ可能性が高い。

たしかなり・大引_キに居て笑ひかは 宝九宮

4 ○ 欠落のしこたま着_テもやかてぬき

(欠落のしこたま着てもやがて脱ぎ)

「欠落」は一般に「出奔」の意だが、ここでは特に「相思の男女」の出奔のこと。手持ちの着物を着られるだけ着て出るのだが、やがて生活のために少しずつ脱いで売ることになる。

かつかれる夜ハころぶ程ぶつ重_キ 宝十一義1

5 ○ 持参金うにこふる迄のんだつら 五10

(持参金うにこうる迄飲んだ面)

うにこうる_ニウニコール(イルカに似た海獣)の牙を粉末にした薬。解毒・解熱剤。食あたりの毒消し、疱瘡の熱下げなどに用いた。(江)

ここで「うにこうるまで飲んだ面」とは、うにこうるを飲むほど重い疱瘡に罹り、大あばたになってしまった

8 × かまと数あべこへにするしよかつりやう拾六4

(竈数あべこべにする諸葛亮)

諸葛亮(孔明)が司馬懿と対峙した祁山から退却するときの計略を詠んだ句。この時、孔明は竈の数を増やしながら退却したため、司馬懿は孔明が伏勢の数を増やしているのではないかと疑って追撃を断念することになる。戦国時代に、斉の孫嬪が退却に当たって竈の数を減らし、伏勢の存在を隠したという故事があるので、主題句はこれを踏まえて「諸葛亮があべこべにした」と詠んだもの。席上では、「天下三分の策」の句ではないかとの意見あり。

迹なから竈をふやす腹の能_サ 別下28

9 ○ 五六けんあるくしん物目かくほミ

(五六軒歩く進物目が窪み)

季節の進物(お歳暮の類)を五六軒たらい回しにしている間に、進物が傷んで目が窪んでくる。鯛か鴨であろうが、席上では目が窪むは鴨の方かということに。

かもつがひかんきあたりの目がくぼみ 一八34

10 × 仲人ハもふあすたよといそく来

(仲人はもう明日だよいそいそ来)

そのままの句。婚礼をする家へ、仲人が「婚礼はもう明日だよ」といそいそとやって来る。当人たちは勿論であるが、仲人も浮き浮きしてじつとしていられないのである。

花の根を仲人ハ度々廻しに来 五六 24

11 × もてるやつこふた見やれとすけさせる

(もてる奴こうだ見やれと助けさせる)

助けるⅡ人の盃を飲んで助けてやる。(江)

遊里や宴会などで「もてるとこうなんだ、よく見る」などと言って、自分の盃の酒を傍の遊女や踊子などに助けさせ、見せびらかしているといった光景。

おとり子がすけておのくやかましさ 八 14

12 ○ 藪いしやハ肩先^キへ来^ルもん所 拾九 31

(藪医者^ハは肩先へ来る紋所)

礎講者は、主題句(拾遺)につき柳雨『風俗志』に「縫直し」と頭注あり、羽織を縫い直したために紋所が肩先にずれてしまったという解釈と思われるが、納得できず不明句とした。

席上では、①太鼓医者が羽織を片袖脱いでご機嫌を伺っている様子、②藪医者は貧乏なので、寸法の合わない

大忙しの大三十日に、乳母が臨時のお手伝いで昆布巻き用の鮎を焼いている図。

かけ取^リハふなをもちやげてすいつける 安元義 4

16 × どちらにあひたいかまつこのねかひ也 五 10

(どちらに会いたいが末期の願いなり)

父親が末期の願いに「どちらに会いたい」と言う。放蕩が止まないために勘当した息子だが、本当は可愛くてたまらないという親子の情を詠んだ句だろう。

かんどうのわびハ今わの母かいゝ 明三礼 6

17 ○ むこに行ことを茶やから訴人する 五 10

(贅に行くことを茶屋から訴人する)

訴人Ⅱ人を訴え出ること。(日)

馴染み客が贅に行くという情報をキャッチした引き手茶屋が、急いで妓楼の遊女に伝えている様子。贅に行けば遊びはできない。吉原から足が遠のく事になれば、遊女にとっても茶屋にとってもゆゆしいことである。

ゆひのうふを茶やのかゝあかそ人する 寛元満 2

18 × 死水を取たハ今井斗^ッなり 五 10 拾五 24

(死に水を取ったは今井ばかりなり)

貰い物の羽織を着ている様子、との意見が出されたが、ひとまず柳雨説を頂戴することに。

懷医者の肩先に紋 ケイ五 19

13 かけ取^リのとほして来^ルて春てなし 五 10 拾初 9

(掛け取りの灯して来るで春でなし)

大晦日に夜を徹して集金に回っている掛け取りが、夜も明けかけているのに提灯を付けてやって来る。暗い内はまだ春(新年)になっていないぞというのである。

かけとりハ去年とやいハんすかたなり 拾四 21

14 ○ 姫の下女^ハもけさ程にくまれる 拾十 29

(嫁の下女これも袈裟ほど憎まれる)

「嫁の下女」は、里から嫁に付いてきた下女。俚諺「坊主憎けりや袈裟まで憎い」を踏まえて、嫁が姑に憎まれるとばつちりで嫁の下女まで憎まれると。

姫の下女^ッ穴しやといぢめられ 明二松 4

15 ▲ 大三十日乳母ハ加役にふなをやき

(大三十日乳母は加役に鮎を焼き)

加役Ⅱ本職以外に臨時につとめる役。(日)
正月料理の一つに鮎の昆布巻きがある。正月の準備で

木曾義仲最期の句。「今井」は義仲の四天王の一人今井四郎兼平。敗軍の義仲は、近江粟津が原で馬が深田に嵌ったところを射られて落命した。その最期の時まで義仲に従い、敵を防いでいたのは今井一人であった。

死水を取るハ兼平斗^リなり 一三五 25

19 ○ ふけ米を座頭へ五俵おつ付^ッる 拾九 31

(腐化米を座頭へ五俵押つつける)

腐化米Ⅱ水濡れ・湿気・虫食などによつていたんだ米。江戸時代、年貢米回送などの際にこれが生じると、その分は正米と取り換えるか金納とした。(日)
いたんだ米五俵を座頭に押し付けたという句であるが、状況がはっきりしない。

因みに、この句は柳雨『風俗志』に採られており、句の配列から見て、御不勝手^ハの旗本が座頭金返済の代わりに腐化米を押し付けたと解釈されているようであるが、席上では、疑問の声が多く、なお検討ということに。

20 ○ てんじやうがだいては入^ルとせげんいゝ

(てんじやうが抱いて入ると女衞言い)

「抱いて入る」は、共犯者として共に入牢させること。
礎講者は「てんじやう」は「天上」で最高なものの意

とし、この娘は、最高なものが自ずから付いてくるようないい玉だと、女衞が売り込んでいる様子とした。

席上では、はっきりしないものの、ひとまず礎講通りということに。

せんだんの二ッばをぜげんほちり出し 一三・一七

21 ▲ そだくとこま下駄をぬくすばらしさ 五・一〇

(そだそだと駒下駄を脱ぐすばらしさ) 拾七・一八

すばらしいおどろくべき事である。ひどい。(江)

大門待ち伏せの句。浮気客を大門で待ち伏せしている新造・禿が、目的の客を発見して「そうだ、そうだ、あそこへ来るのがあの人だ」と駒下駄を脱いで捕まえる準備態勢に入る。これから大変なことになる。

駒下駄で生捕を引く中の町 二六・五

22 ○ 二会目にふつたハつれか口ばしり

(二会目に振つたは連れが口走り)

遊女が、二会目(裏)に客を振つたことを、その客の連れが口走ったという意のようである。振られたのは体裁のいいことではないので隠しておいたのを、連れが暴露してしまったのであろう。

やばなやつふられた事をひしかくし 六・一八

礎講は、「結ぶ」を「取り持つ」の意とし、吉原の小便所で友だちと用を足しながら「あいつとあいつの間を取り持ったのは俺なんだよ」などと話をしている様子とした。

席上では、状況分らず不明句ということに。

26 ○ 犬坊かまことのいはい知行なり

(犬坊がまことの位牌知行なり)

犬坊Ⅱ犬坊丸。工藤祐経の嫡男。

位牌知行Ⅱ先祖が功によって得た俸禄をそのまま世襲すること。またその俸禄。軽蔑の意で用いられる。(目)

犬坊が父祐経の俸禄を世襲したのは、まことの位牌知行だと言うのだが、「まことの」と強調している意味がはっきりしない。五郎を罵倒した犬坊を単に嘲っているだけか、あるいは芝居種にそのような場面があるものか。鼻にしわよせて犬ぼういきどほり 一二・一三

27 ▲ 江の嶋ハつつついてさへ行所 五・一〇

(江の嶋は突つついてさえ行く所)

江の嶋は、江戸から簡単に行ける観光地であると同時に、盲人の信仰の篤い弁財天のある所。したがって、盲人達が杖を突つきながらも行くところだというので

23 ○ 乳母斗リ二七日めにゆるすなり

(乳母ばかり二七日目に許すなり)

二七日Ⅱ人の死後十四日。またその日に行う仏事。

四十九日迄は精進をしなければならないところを、乳母だけは特別に十四日目に生臭物を食べるのを許される。滋養の付く物を食べないと、お乳が出なくなるのである。

いつそ身につくとまぐるを乳母ハ喰 拾九・三〇

24 ○ ぞうさくをしますと嫁にいつけさせ

(造作をしますと嫁にいつけさせ)

礎講は「いつける」は「いつける」(乗つける)の意、「造作」は「化粧」の意として、姑が「お化粧をしますから」と言つて、嫁にお歯黒を火に乗つけさせる様子とした。

席上では、「いつける」は「居付ける」で、嫁が姑と折り合いが悪くて実家へ帰りそうなので、家族あるいは周囲の人達が「隠居所を建てて別居させますので」と言つて、嫁を居付けさせる様子ということに。

いんきよ所をたてさせますと里へわび 天五信 三

25 ○ むすんだハおれだと小便所からいゝ

(結んだは俺だと小便所から言い)

ある。

座頭さん又嶋かへとわたしもり 一二・九

28 ○ 御手にでもあわにや能かと母はいゝ

(御手にでも会わにやよいがと母は言い)

御手に合うⅡお上のお手にかかる。召捕られる。(江) 礎講は、息子が博奕に手を出していることを知りながら、それを咎めるでもなく、「お手に合わなければいいが」などと甘いことを言っている母を詠んだ句とした。

席上では、博奕をしているのを知っているのではなく、出来の悪い息子について、「ともかくお手に合うような犯罪行為だけはしないでくれればいいが」と心配している様子ということに。

29 ○ かべぞしやう先ッよのことをはなし出し

(壁訴訟まず余の事を話し出し)

壁訴訟Ⅱ①訴える相手がなく、ひとりであつと苦情をいうこと。②間接のお願い。それとなく頼み込むこと。③遠まわしにあてこずること。(目)

壁訴訟は、まず関係のない他のことから話し出すというところ。それだけの句のようである。

いつそもふのどかに花のかべぞしやう 明八信 一

30 ありんすを通ひ御針もちつといゝ 五 10

(ありんすを通ひ御針もちつと言ひ)

吉原へ通いでやつて来る御針(裁縫女)は、周りの遊女が使っている「ありんす言葉」をちよつと使うようになる。

江戸風にお見えなんすとお針言^イ 二九 24

31 ○ かゞミ餅どらがぶんだと母はとり

(鏡餅どらが分だと母はとり)

年末の餅搗きで、母が「これはドラ息子の分だ」と言つて鏡餅を作っている。勘当で銚子へ遣られている息子の許へ、配り餅でもしかねない甘い母の行動である。

32 × 売^ッやうにいはいははたく十三日

(売^ッるように位牌をはたく十三日)

十二月十三日の煤掃き。位牌にもまるで道具屋のするようにはたきをかける。

御持仏ハおふくろがゝり十三日 一二九 17

